

基礎心理学実験法ハンドブックに寄せて

基礎心理学の骨格をなすものは心理学実験であり、その実験を成り立たせている根本は方法論にある。本ハンドブックは、心理学の実験法について編んだものである。

心理学の対象は「心」や「行動」であると言われているが、「心」を直接観察したり取り扱ったりすることはできないし、「行動」もまた連續的で変幻自在な対象であって捉えどころがない。基礎心理学者は、こうした対象を観測し操作しなければならない。そして科学的に意味のあるデータを紡ぎ出すために、これらを組織的に組み合わせていかなくてはならない。この営みが心理学実験の方法論として、集積され淘汰されてきたのである。別の言い方をすれば、実験法こそ、「心」や「行動」を表現し測定し変容させる、基礎心理学者の重要な道具なのである。そして新しい方法の発見は、常に新しい心理学的な知を創造してきたのである。

このハンドブックは日本基礎心理学会創立30周年の事業の1つとして提案され、本学会の会員を中心として編まれたものである。私たち責任編集者には2つの願いがあった。もちろん第一には、実験系の心理研究者や大学院生・学部生に自身の専門領域だけでなく、関連する領域での様々な実験法を俯瞰し利用するための必携図書として活用していただきたいという願いである。しかしそれにもまして、実験系以外の心理学者、あるいは自然科学、社会科学、人文科学に関わる研究者や学生で「心」や「行動」に関わる研究を進めていきたいと考えておられる方々にも論文理解や研究計画の折に繙いていただきたいという強い願いを持っていた。それは、基礎心理学における心理学実験から得られた知見こそが、厳格な科学的吟味に耐え、様々な領域での将来の応用につながる大切な知的基盤を構成すると信じているからであった。その信念の背景には、特に21世紀に入ってからの急速な「心」や「行動」の脳神経学的、コンピュータ科学的理解の進展の中で、私たち基礎心理系の研究者の果たす役割は少なくなっていくどころか、新しい「心」や「行動」の事実を発見することにおいてますます大きくなしていくとの認識があった。

本文と付録で約89万字となる本ハンドブックの第一の功労者は、言うまでもなく165名におよぶ日本基礎心理学会会員を中心とする執筆者の方々である。そして第二の功労者は、各章で執筆者のとりまとめと編者校正に活躍された24名の編者の方々である。そして、代表者としてさらに御礼を申し上げたいのは、ハンドブックの基本的方針の取りまとめ、各章の項目の設定と校正、全章のバランスの調整に、7年の長きにわたり付き合っていた責任編集者5名の方々と朝倉書店編集部である。

特に、三浦佳世・九州大学名誉教授、行場次朗・東北大学教授、木村英司・千葉大学教授の各氏は、小生が日本基礎心理学会理事長職に就いた時からずっと、常務理事としてご活躍になる一方で、このハンドブックの制作に携わっていただいた。また朝倉書店の企画担当者には、このハンドブック誕生のきっかけを作っていた。なぜなら私が彼にちょっと話したアイデアを、瞬く間に具体的なものに仕上げていただいたのである。2011年11月28日付けメールで初めて担当者からハンドブックの話が出た後に送った私からの

12月14日付けのメールには次のような記述がある。

- 「1) 心理学的現象に興味のある他領域の研究者も心理学実験の方法を学べる、使える、
- 2) コンパクトでありながら参考文献が充実、
- 3) 見開き2ページ、長くても4ページが原則、
- 4) 歴史、方法の詳述、得られた事実や現象の例、問題点や限界、新たな工夫、
- 5) 本当は方法論の進化史のような形式になると美しい、
- 6) 感覚、知覚、認知、学習、生理の5つの領域の基礎心理学会会員の責任執筆、
- 7) 基礎心理学会の事業として行う。」

さてこのうち、どれだけのことが成し遂げられ、また成し遂げられていくのだろうか。
それは本ハンドブックを手にした読者の方々の評価に委ねられている。

2018年5月

責任編集者を代表して 坂上貴之